

阿部浩一・福島大学つくしまふくしま未来支援センター編  
『ふくしま再生と歴史・文化遺産』

山川出版社 二〇一三・一一刊  
四六 二七二頁 一八〇〇円

本書は、二〇一一年三月の東日本大震災後の福島での被災歴史資料レスキューが、福島第一原発事故による放射能とのたたかいを伴いながら展開したのか、人々の生活基盤やこれまで培われた文化が根こそぎ奪われるという類例をみない事態のもとでの、懸命な活動の記録であり、今後の課題が具体的に示された、注目の一書である。

全体は、二〇一三年二月三日に開催されたシンポジウム内容をもとに構成されている。まず五味文彦氏による基調講演「歴史資料の魅力と活用」では、災害を自分の身体で受け止めてそこから生き方を探った鴨長明『方丈記』を手がかりとしながら、地域の歴史を掘り下げ、その魅力を発信することの意義を説く。

第一部「原発事故警戒区域内の文化財保全」は、原発直下の自治体の文化財担当者・学芸員（大熊町中野幸大氏、双葉町吉野高光氏、富岡町三瓶秀文氏）、および福島県の文化財担当者（丹野隆明氏）による論考である。①事故直後から自治体職員として避難者対応等が最優先となり文化財保全には十分対応できなかった点、②放射線被爆に対する安全性確保の点から、警戒区域内での国・県職員も含めた組織的活動が本格的に可能となったのは、翌二〇一二年

五月の福島県被災文化財等救援本部の発足と、国の被災文化財等救援委員会による警戒区域内での運用規定の確立以降となった点、③警戒区域内への立入りが制限される中、資料レスキューの対象となったのは主に博物館・資料館の館蔵資料であり、資料の移動毎に放射線量を測定し、その履歴を記録しながらの作業となったこと、④一時保管先の容量の限界から、館蔵資料ですらそのすべてを搬出できず、町内の指定文化財の保全も部分的で、ましてや個人所蔵の歴史資料や無形文化財等についてはほとんど調査できない危機的な状況が今なお続いていることが指摘されている。

第二部「福島県の歴史・文化遺産の今、そして未来」は、歴史資料のレスキューだけでなく、それらを活かした地域文化再生への共同の取り組みとその意義を論じている。泉田邦彦氏は、警戒区域内の自宅所蔵の資料レスキューを茨城史料ネットの支援を受けつつ自ら行い、また地名・伝承等の「地域の記憶」の記録化を進めてきた経験から、多くの重要な論点を指摘する。本間宏氏は、「計画的避難区域」となった飯館村での資料レスキューと、それらをもとにした村民文化祭の復活を通じて、散り散りになった村の人々が集まり、地域に根付いていた文化を絶やさない取り組みを紹介する。内陸部中通り地域の須賀川市で、絵馬等の資料レスキューとその展覧会をきっかけに、地元「須賀川知る古会」と連携してワークショップ等、文化財を活かした地域の活動への発展を示す内山大介氏の論考、そして震災の前年に発足したふくしま歴史資料保存ネットワークとともに、積極的に資料レスキューを進めてきた福島大学の取り組みを紹介し、既存のつながりを越

えた「場」や新しい「福島県史」編纂の必要性を説く阿部浩一氏の論考がある。

また、第三部「ディスカッションと提言」は、当日の討論とともに、「震災ミュージアム」の設置を国に求める菊地芳朗氏の論考がある。旧警戒区域内に残されたままの文化財救出を急ぎつつ、既に仮施設に搬出された被災文化財の十分な保存と活用ができるようにするために、恒久的施設としてこれを設置し、研究・防災はもとより、避難を余儀なくされている地域住民の結びつきを編む拠点にしていこうという、重要な提起である。

本書の端々から、原発事故が引き起こした「地域と人間の断絶」（一六八頁）の中で、自らが育った地に戻れない人々の喪失感と、だからこそ地域で生活を築いてきた証を未来に残したいという歴史学への痛切なる期待、そしてこれに真摯に応えようとする担い手の強い意志を、受け止めることができる。本書に示された福島からの声を正面から受け止め、決してこれが福島だけの問題ではないことを胸に刻み、呼応する取り組みを歴史学全体の課題として果たしていくべきであろう。

（町田 哲）